風と共に去りぬ

今から８年前、退職により会社勤めからの解放感から、私は不摂生な人生を送っていました。端的な不摂生は暴食（飲む方はあまり得意ではないから）で、160㎝足らずの身長に体重は78㎏、今考えると超デブの範疇でした。

案の定、人間ドックの成績は「要注意」、「要再検査」のオンパレードで、特に判定区分がAからGまでの6段階で「D：治療を必要とします」と評価されたHbA1c、糖代謝の値が6.5と高く、糖尿病予備軍のレッテルを張られ、糖尿病科の診察を受けることになりました。

糖尿病科の医師、F先生は強面の医者で、私の人間ドック報告書を睨みながら、「このままの状態が続くと、6か月後には人工透析、さらに6か月後には壊疽によりどちらかの足の切断することになります。どうされますか。」、と言って、ギョロッと私を見上げます。私からの答えが分かっているくせにこんな意地悪な質問をする性悪の先生にぶちあったって、こりゃあこの先大変だと思っていたら、先生曰く「もしそれが嫌ならあと10㎏体重を減らしなさい。」　その後くどくどと、飯は半分にしろ、甘いものは食うな、運動をしろ、食べた物を毎日記録しろ、3カ月毎に診察に来て状況を報告せよ、と立て続けに命令します。この状況下では私には拒否権はないので、神妙に拝聴して引き下がりました。

体重超過は確かにそうだと自覚していたので、その日の晩飯から鬼のF先生の命令に従って食べる量を減らし、食後のスイーツも止めました。次の日から近くの山道をゆっくり走りパンツまでびっしょりになるほど汗をかきました。それから「糖尿病手帳」を作り、毎日、口に入ったもの全てを記録し、体重を記録し、甘いものは一切やめました。

以前にもダイエットの経験があり、リバウンドの恐ろしさも十分理解していたので、3カ月後には10㎏減量し、その後も少しずつ減量を続け、リバウンドは起こしませんでした。減量すると精神的にも充実し、達成感のような高揚感でゴルフも上達したような気持ちにさせられ、強面のF先生の感謝する気持ちになりました。

２年後の診察の時、F先生から病院を移るので、その後は新しい先生に引き継ぐことを告げられ、3か月後の診察の時に新しい女医先生と対面しました。私の長女によく似た小柄な先生で、甲高い女らしい声で時々甲州弁の混じった話し方をする魅力的な方でした。私が気に入ったのは彼女の楓と言う名前でした。

糖尿病の治療を受けると「糖尿病連携手帳」なるものに、診断の度毎の体重、血糖値、尿検査、血液検査の結果などが記載されます。楓先生は連携手帳の過去の記録をご覧になり、「そんなに悪くないじゃん。反対にいい位だよ。このまま努力を続けろし。」と激励してくれ、私をその気にさせてくれました。

一昨年の秋の診断の時、先生から「しばらくやっていないようだから、たまには検便をしろし。」と言われ、直接糖尿病には関係ないじゃんと思いながらも、昨年の3月に検便を提出しました。検査結果では「潜血あり、要再検査」とあり、内科で内視鏡検査をしました。検査の結果は「少し大きめの大腸ポリープがあるけど、色から判断して悪性ではないようなので経過観察としましょう。」と伝えられ、相談した楓先生からも「少し大きめではあるけど、どうする？3ヶ月くらい経過を見て再検査してみたら？」と言われ、6月に再検査をしました。検査に先立ってCT検査をした結果、ポリープ以外に、腸間膜に腫れがあることが分かり、ポリープ除去と、腸間膜の腫れの原因を特定するため、7月に急遽2週間の入院となりました。

それから9月までの2カ月は慌ただしいものでした。検査結果から腸間膜の腫れは悪性リンパ腫の腫れであり、血液内科のある山梨大学附属病院に転院して治療を受けることになり、正式な病名「濾胞性リンパ腫、ステージ３」を告げられました。梨大病院の先生は楓先生の知人でもあり、楓先生が濾胞性リンパ腫の意味を教えてくれました。「急激に転移したり悪化するような種類ではなく、地道に治療すれば治る癌の一種です。点滴による抗がん剤治療を半年から1年続け、経過を見るというのが梨大病院の先生のお話でした。頑張れし。」とあくまで楓先生は前向きです。よくよく考えてみると、癌の発見と治療は楓先生の「検便をしろし」から始まったものだったので、先生の慧眼ぶりに感心し、その後の励ましに感謝し、楓先生のお言葉に従うことにしました。

抗がん剤治療の間にも、3ヶ月毎の糖尿病の診察は継続していましたが、やはり抗がん剤治療は体への負担が大きく、治療開始時より体重が10㎏近く減りました。糖尿病にとってはこの減量は良い方に働き、昨年の暮れの検診では糖代謝の数値の大幅な改良が見られ、楓先生から、「もう糖尿病は克服したので今回で診察は終わりにしましょう。よく頑張って努力してくれました。」と言われ、嬉しいような寂しいような複雑な感情に襲われました。

高校時代、社会科の大関先生に「悪貨は良貨を駆逐する」と言う金本位制に関する経済学のグレシャムの法則を教わりましたが、私の場合、「癌」と言う悪貨が「糖尿病」と言う良貨を駆逐したことになると同時に、密かな恋心を抱いていた楓先生まで駆逐してしまったのです。その上、3月の年度末で楓先生がどこかの病院に移動になると人伝に聞き、寂しさと共に、7年間患った糖尿病は「風」ならぬ「楓と共に去りぬ」と言う現実をもたらし、糖尿病に対するノスタルジアをため息と共に受け入れました。

 完

2021年6月13日

Oxan